

音楽を楽しむための表現辞典の作成と教育実践への検証

丹治信(東京大学 知の構造化センター 特任研究員)

研究の背景と目的

新学習指導要領(音楽鑑賞)では、音楽を言葉で表現し伝える能力が必要とされるが、現状の教育では児童の音楽的な語彙は少なく、音楽から感じたことを自分の言葉で表現できない。本研究では、「小鳥がさえずるようなフルートの旋律」などの音楽表現や音楽用語を含んだ「音楽を楽しむための表現辞典」(以下、音楽表現辞典)を作成する。また、児童教育への有効性の検証として、辞典を利用した教育実践を行い、音楽表現の学習が児童の言葉による表現へどのように影響するかを実際の音楽鑑賞の授業内で確認する。

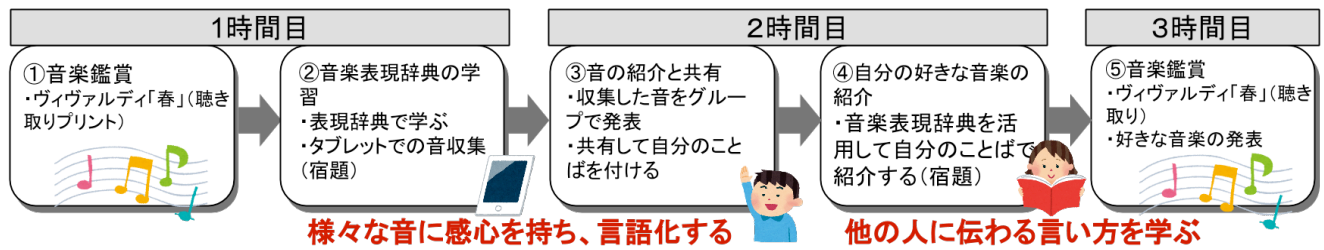
表現の収集と音楽表現辞典の作成

①音楽表現の収集:豊かで個性的な音楽表現を収集するために書籍・漫画から音楽表現を収集した。収集では、書誌情報や表現の抜き出しと共に、表現が肯定的・否定的か、言及する楽曲などの属性情報を加えた。また、WEBを用いたクラウドソーシングでも収集を行った。最終的に約330作品から約3000例文の表現が得られた。

②音楽に特徴的な用語と見出し語の抽出:自然言語処理と機械学習技術を活用し表現の分類を行った。各表現には辞書の見出し語に当たる語・要約表現を付加し、音楽表現辞典としてまとめた。

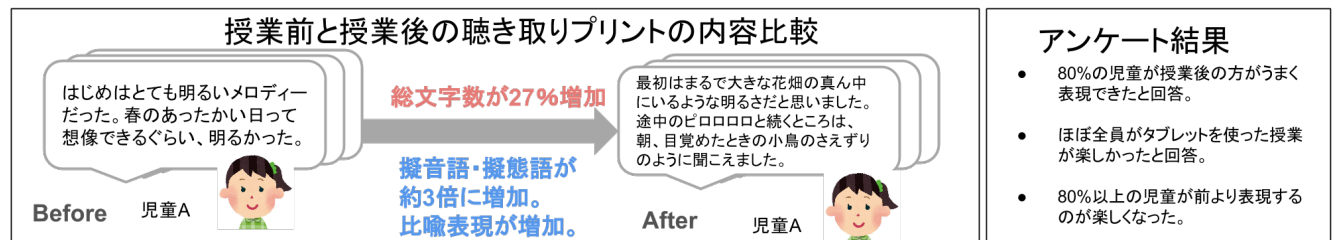
教育実践の方法(音楽表現辞典の学習とタブレットでの音楽鑑賞教育の支援)

以下の流れで今回作成した音楽表現辞典と音楽表現収集アプリを用いた教育実践を行った。



教育実践の結果

授業の前後での音楽鑑賞で、児童の聴き取りプリントを分析した結果以下のことが見られた。



音楽教育への効果

教育実践校関係者からは以下の評価が得られた。①児童が音楽を言葉で表現することを身近に感じ、主体的に取組む姿が見られたこと②短期間の間に表現力の増加が見られたこと③児童が日常的に聞いている音楽の多様化が進んでいるが、それらを児童が言葉で紹介することでどのような思いでどのような音楽を聞いているか教師自身が把握できたこと。

音楽表現辞典については、音楽家(指揮者二名)によるレビューを実施し、音楽家の観点から有効性の確認を行った。

研究過程で生じた課題と工夫したこと

当初予定では、一回目の音楽鑑賞→音楽表現辞典での学習→二回目の音楽鑑賞という授業実践の流れを想定したが、学校長・担任・教育実践を担当する教諭との打合せをする中で、児童が受け身の授業になってしまう点が課題として挙げられた。そこで、タブレットを活用(上記)し、児童主体の学習時間を増やすことで、音と言葉についてより身近に学べるよう工夫した。

まとめ&今後に向けて

本研究の教育実践から、音楽表現辞典を用いた授業が児童の表現力を伸ばすことが確認できた。今後、手法を一般化して普及を図るために、他の小学校や小中学校以外でも検証を実施したい。音楽表現辞典については、WEB公開や書籍化することも検討する。加えて、言葉で表現し伝えるという点において、例えば、語り継がれるべき地方の音楽や民族芸能などの文化を残すことにも同様の実践を実施できるのではないかと考えている。